

『百人一首のルーツ』

人も惜し 人もうらめし あじ気なく
世を思う故に もの思う身は

後鳥羽院

[現代訳]

人間がいとおしくも、また人間が恨めしくも思われる。
つまらない世の中だと思つために、悩んでしまうこの私には。

作者は後鳥羽院

源平合戦で安徳天皇が都落ちになり後白河法皇によって天皇に立てられました。後鳥羽院は中世屈指の歌人であり、特に九条家歌壇の御子左家の俊成に師事し、その息子である定家を取り立てて新古今和歌集の編算を命じます。

1221年 天皇家の実権回復を望み 執権 北条義時を追討する院宣を出します。これが承久の乱です。 戦いはわずか1日で敗北し、後鳥羽院は隠岐、順徳院は佐渡に流されました。後鳥羽院が隠岐で崩御し、その後を追うように北条義時がこの世を去りました。

このことから人々は後鳥羽院の崇りではないかと騒ぐようになりました。

藤原定家は後鳥羽院の御霊を鎮めるため百人一首という鎮魂の歌集を選んだと言われています。

百人一首を並べかえると後鳥羽院が最も愛した水無瀬離宮の絵図になるからです。

後鳥羽院はことのほか菊を好み自らの印として愛用しました。

その後、歴代の天皇に継承され、十六葉八重表菊が皇室の紋として定着しました。

山陽小野田かるた協会 小田広行